

## 令和6年度第1回京都府総合教育会議

- 1 日 時 令和6年5月9日(木) 午後1時00分から2時30分まで
  - 2 場 所 京都府職員福利厚生センター 第4・5会議室
  - 3 出席者 西脇知事、前川教育長、小畑教育委員（教育長職務代理者）、  
千教育委員、安岡教育委員、藤本教育委員、鈴鹿教育委員
  - 4 次 第
    - (1) 開会
    - (2) 意見交換
    - (3) その他
    - (4) 閉会
- 

### 1. 開会

#### ○出席者紹介

#### ○知事あいさつ

どうぞよろしく申し上げます。

総合教育会議は、京都の教育現場を取り巻く現状と課題を共有し、それを踏まえて、連携につつましても、議論したいと思います。

今日の議題とは違うんですけど、先月11日に、私と、新しい京都市長の松井市長で、それまでの懇談会、京都府京都市の懇談ですけれども、トップミーティングと名称を変え、複数回開いて意見交換をしようということとしました。その第1回で、京都府立高校と京都の市立高校との、合同で探求型の、ジョイント事業を実施したらどうかと市長からもございまして、それを今後は、高大連携につなげるとか、もっと言えば、産業界でも、今年度は始まっておりますので、急にはできないですが、当面は今年度、何ができるかということについては、教育委員会の方でいろいろと工夫をしていただければありがたいと考えておりますので、今日のテーマではないんですけども、よろしくお願ひしたいと思っております。

今日は今年度第1回ということで、子供たちにとっての大阪・関西万博ということで、提案しておりますが、前のお阪万博1970年で、それから愛地球博から20年後ということで、来年万博が開催されます。

万博会場の中に、関西広域連合の仕組みで、関西パビリオンというのを立てることで着工しております、あそこに京都ブースというのを作るようになっておまして、京都のいろんなことを紹介することもあります。半年間の万博の期間中に、どういうイベントが行われているとか、そういうことも紹介できるような、まさにゲートウェイとしての機能を果たそうということもしております。

委員の皆様それぞれ、年齢とか関係は違うんですけども、万博にどういう思いがあって、私自身が中学3年生でございまして、ほぼ毎日のように、英語の勉強を兼ねてですね、毎日行ったことを覚えております。当時としては、海外の文化とか人に触れるのも初めてということで、あそこに行けば、国際的な、そういう雰囲気もあったというような思い出がありません。

国際博覧会条約の中にも、博覧会とは名称のいかんを問わず、公衆の教育を主たる目的とすると定義をされてるということもあります。私は前回の万博がそういう経験だったんですけども、発表する子ども、もちろん大人もそうなんですけれども、少なからず影響を受けることがあるということで、今回、子どもさんたちにできる限り体験できるようにということで、学校の団体割引の価格も非常に安く設定されたりとか、教育旅行に対する優遇措置もあると思いますし、我々も非常に貴重な教育機会だということで、学校行事で万博に行く場合の支援も表明させていただいております。

そういうことで、今日はですね、我々もせっかく支援をするのであれば、是非とも子どもたちに様々なことを学んで欲しいなと思います。

もう1つは、万博会場はもちろんなんですけれども、それ以外にも、京都を含めた関西全域で、いろんなことも体験してもらおうというようなこともありまして、そういうことも大阪・関西万博京都推進委員会でいろいろ企画しておりますし、そういう企画立案にもですね、やっぱり子どもさんたちの教育にどう活かすかとか、そういう視点も必要だということで、今日はいつもよりも、ざっくばらんに意見をいただきたいと思いますし、教育長とかあと事務局にとっても、事務局がこれからもう1年を切っておりますけれども、いろんなことを考える際の参考になるようなご意見を承れば非常にありがたい。長くなりましたけれども、どうぞよろしくお願ひしたいと思います。

## ○前川教育長あいさつ

本日は第1回の総合会議に参加いただきましてありがとうございます。まず冒頭の話でございますが、教育委員の皆様のご意見をいただきながら、しっかりと、継続的にまた発展的に構築していけるように検討させていただきたいというふうに思っております。

今日のテーマの万博についてでございますが、私も小学校で行かせていただいた思い出がありますが、今回、より未来に繋がるという点で子どもたちの学びがしっかりと形成されるように、どのような取り組みをしたらいいのかということ、今日、この場でいただいたご意見をはじめ、検討して参りたいと思いますので、どうぞよろしくお願ひいたします。

## ○「大阪・関西万博の教育現場での活用について」～概要説明

(総合政策環境部 岡本部長)

## ○意見交換

(西脇知事)

冒頭にお話させていただきましたけれども、今日は子どもたちにとって、万博がどんな意義があるかというようなことにつきまして、意見交換をしたいというふうに思っております。

せっかく大阪・関西万博が地元関西で開催され、京都府北部からでもぎりぎり日帰りも可能なということで、是非とも足を運んでいただきたいと考えておまして、我々も先ほど説明しましたように、支援をすることも考えております。これは、楽しかったなっていうだけではもったいないというふうに思いますし、おそらく教育委員会の方としてもですね、やはり一定の学習の機会だというふうに思っておりますので、是非ともよろしく願いいたします。

先ほど万博会場でのビジョンといたしまして、実はまだできてないところもあるし、コンセプトを発表してないところも多いんですが、できる限りの情報という範囲で紹介しております。

実際に子どもさんたちに足を運んでもらうときには、恐らくはもっと、それぞれの学校ごとに、具体的にもうちょっときめ細かなスケジュールをされるんですが、今日はそういうことよりも、どんなことを体験学習して欲しいか、そういうポイントですとか、万博に対する教育上の期待とか、そんなことをですね、皆様から、まず1点目としては、ご意見を賜りたいなというふうに思っております。

(小畑委員)

小畑でございます。私なんかでもですね、万博というと70年ですけども、70年の万博は、どうやって、より成長社会を作っていくかっていうことを、どうやったらいいかっていうことを考えていたと思うんですけども、その頃の高度成長の時代は、将来の夢を共有しやすい時代だった。そういう意味で、万博が提案するテクノロジーとか、新しい未来社会、こういったものを純粋に楽しむことができた万博だったんじゃないかという感じがしますね。だけど今の時代は残念ながら、人口減少、少子高齢化、経済縮小、それから価値感が多様化している、貧困格差というような時代になってるので、そういう社会問題を解決することは簡単に出でこないし、その乗り越えた未来社会も、あまり全員が共通してイメージすることがやりにくい。70年万博のときのように、単純に、素直に、喜ぶ、楽しむことができるわけじゃないと思うんです。今抱えている私たちの課題というものに対する解決策とか或いはその先のことをどういうふうに考えていくかという舞台としての役割が、今回の万博にはあるんじゃないかというふうに思うんですね。

今の教育は、何が大事かという、課題探究力とか、課題解決力をつけるような人材を大いに育てていこう、そのために、解決型の授業とか課題探究型の学びっていうのも非常に大事にしてやってるわけですね。ということは、今回の万博が果たしていく役割は、軌を一にするものがあるというふうに思うんですね。70年万博のときよりもずっと共有できるとい

うふうには私思う。

そうそう意味で、探究の舞台として大いに活用して、普通の学校の中ではできないような壮大な課題探究型の授業というのは、グローバルで、地球規模で、様々なテクノロジーを紹介されているような舞台での授業という、そういう万博の舞台の上で、教育を生徒と一緒に、子どもたちと一緒に作っていく、そういうふうには活用していかなくやいけないんじゃないかなと思います。

だから、単に修学旅行とか遠足でどんどん来てくださってという、それだけのことで、ちょっともったいないですかね。今回の万博の役割としての役割を果たせないんじゃないか。壮大な舞台の上で課題解決型の授業を受けて学んだことを、30年40年後にどういう新しい社会を作っていくのか、期待をする、そういう万博と教育の関係なんじゃないかと思えます。

(安岡委員)

明治維新の1868年の5年後にウィーンでは博覧会があってそれに初めて参加をしたとき、西洋の技術革新について非常に驚いてですね、また逆に日本の伝統的なものを出して、それで国家高揚というか、そういったアピールが必要であるところだと思うんです。

それが時代の流れとともに技術革新等をいろいろと提示する、交流すると、テーマがだんだん変わってきてる。

そういった中で、1970年の万博は私は中一でしたけれども、何となくワクワク感で行っただけで、月の石を見て普通の石やなと思っただけですけれども、また、ソ連館の大きな宇宙船とを見て非常にすごいロマンを感じた。小学校で行くのか、年代によって全然感じ方が違うと思うんですけれども。

あの頃は日本というのは、なかなか外国の方々が日本に来られていなかったもので、万博に行くと、非常に多くの外国の方がおられて、その中で、いろいろと接することによって、英語に興味を持ったという自分があったわけで、そういう中で、あの当時は文通をきっかけに英語に興味を持って、京都マンスリーという、京都の紹介するのに英語版で当時出てたと思うんですけれども、それをよく読んでですね、そんな寺社仏閣を楽しんだっていう自分がいたわけですが、子どもたちが今回行くのは、やはりワクワク感でまず導入としては入っていったらいいと思うんですけれども、今回のテーマの中では、SDGsと似たようなテーマであるわけで、そのいのち輝く未来社会、SDGsのテーマというのは17ほどあって、それを目指して今後の未来社会を作っていこうというもので、そういったことをどう学校の中で探究をするか、それに興味を持ってるかっていうことは、まず自分たちで考えた中でもっていかなければ、いろんなパビリオンがあって、その中で取捨選択をしていく、どれに興味を持ってるかっていうこと、そういうのを事前に学校の方で察知しながら、行くパビリオンにおいて、自分たちの学校が1つのテーマを自分たちで決めて、そのパビリオンと結びつけていくことが必要なのかなっていうふうには思っています。

(鈴鹿委員)

前回の万博の時は私はまだ生まれていなくて、何とも言えないんですけども、いろんな方々から話を聞くと、体験していない世代としては期待していますし、子どもたちも万博は初めてで、何があるんだろうと分からないところから入るのではないかと思います。前回の万博のときと違って、今はSNSが多くありますので、いろんな方が写真を載せたり体験をつづったり YouTube で流したりということは起こると思います。それを見て知るだけでいいやということになると、実際に目にすると、体験すると、こんなに違うということが必要になってくる。何を得たのか、並んでさらっと見たということではなく、自分が見たいポイントはどこかということ进行调查して、しっかりと深く学んで、帰ってきたときに、ということが大事ではないか。社会で体験をして、自分が常識と思っていたことが世界では常識ではないということも実感できると思います。

最終的に自分の国というものが世界の中でどういう位置づけにあって、どんな国かということが自分で説明できるかというのが、世界を知るということになる。

政治を話すのがタブーになってるというふうにはまだありますし、それこそSNSで政治の話を書いたらフォロワー数が減るのは、日本は結構そういう傾向がありまして、そういうのが、逆にならずに帰ってきたときに、みんなでこの国はこうだった、それが善し悪しではなく、きちんと話し合いができるような、本当にこの世界からやっていけばいいなというふうに感じています。

(藤本委員)

なかなか難しいテーマです。70年の万博は鮮明に覚えています。あの時代は、行くことが目的みたいになり、みんな何回行った、みたいになって、スタンプ集めてる競争みたいにして盛り上がったことを覚えています。そこに行かないと得られないような、本物の欧米人の方を、テレビでは見たって本物に本当に出会えるっていうのは、外国の方はこんななんだなみたいな、本当に行くことで分かるっていうことがたくさんあるという、そういう時代だったと。やっぱり今皆さんがおっしゃったように、そういうことがもう本当にテレビの中で実現できちゃうので、ここでやっぱり学校教育がそこに連動していく役割っていうのは、非常に意味が大きいのかなと思います。

その中で、皆さんおっしゃいましたが、やはり行くだけのお客さんとして、入場者としてカウントされるだけの様なやり方をしても全く意味がないと思いますし、先ほどおっしゃったように、事前事後のやっぱり学習っていうのが、非常に大事になってくるというふうには思います。

それを全部実現するには、今のカリキュラムでは、今の通りをやりようと思って、これもやり、これもやり、では到底、結局中途半端に終わってしまう。本気でこれを学校教育に取り入れるということであれば、小畑委員がおっしゃったような壮大な、かなりスケールの大き

なプロジェクト学習というもの、時間を割いて具体的にやっついていかないと、学校現場としてはいやこれは急に言われても無理だと、結局はなってしまうのかなというふうには、思っております。

ただ、やはりそれだけ時間をかけた壮大なプロジェクトアプローチするだけの価値は非常に大きいと思うんですよね。そういう意味ではその意味合いというところで、まず何を子どもたちに、学習のねらいとするかというところを、しっかり明確にしてから事前学習して、議論学習すればいいというものでもないと思います。

何を万博を通して、育ちとして未来に持つのかっていうのを、例えば、例えば教科ごとであれば教科ごとにしっかり、そういう専門的なところから、みんなで取り組んでいくことがとても大事なかなというふうに思います。

例えば私は専門が幼児教育なので、幼児教育の中では、イタリアのレッジョエミリアというところで、12年アプローチしまして、世界の幼児教育から注目があっているんですけども、いわゆるレジャーエリアの場合、私が行ってプロジェクターアプローチであったり、探求型の学習ということなんですけども、これは幼児教育ではあるんですけど、先生が全部引いてしまうのではなく、学習の主体者である子どもがまず何をやりたいとか、どんなことを知りたいか、どんなことを準備すればいいのかっていうことを子どもが主体になってやっついていくという、そういう子ども側の権利というのがすごく大事にされてですね。そういうことがすごく大事で、大人が考えたことをやりなさいっていうような、本当それはある程度、やっついていいと思うんですけども、やはり上になればなるほど、例えば小学校、中学校、中学校、高校の方がもっともっとやっぱり生徒が主体的に、どんなことを学びたいということをお互いに議論して、皆が自分たちの、どういう事例を、事前に調べるのがいいのかとか、おっしゃっていくっていうことがすごく大事なのかなっていうふうに思います。

例えばですけども、幼稚園の話で恐縮なんですけど、今度6月にお泊まり保育に行くのですが、昔だったら先生が決めた通りに子どもが動いていく、言ったことを守れる子どもが利口で、ちゃんと、みんなでそういうスケジュールを守っていく。もちろん大事なんですけれども、今はやっぱり子どもたちが現地に行ってどんなことをやりたいのかっていうことを話し合う、それがひょっとしたらできないことかもしれないけれども、そうやってみんなで話し合うことで、お互いの意見を言ったり、協調性が芽生えたりとか、相手の意見をちゃんと聞く姿勢ができたりとかそういう学びに繋がりますし、今までは全部を大人が聞いてたら親が全部それを用意してましたが、どんな持ち物が要って、これはいらぬ、これは駄目だ、そういうことも含めて、やっぱり子どもたちにいろんなものを任せていくっていうことがないと、やっぱりせっかくいろんなことをやっついていっても、大人が与えるだけでは、成果というのは、今から求められていく子どもたち自身の能力的なことと言うと、その学ぶ力をさらに教えていくためには、自主性、主体性というものを、しっかり大切にしていってということが、大事なんではないかと。

それと、やっぱり大事だなと思うのは、学校現場の先生方が本当にこれについて、期待感

を持ち、先生たちが意欲を持ってやらないと、先生たちの意欲が、子どもたちの意欲のMAXだと思います。やっぱり先生以上の気持ちにはなれないと思います。先生が本当にワクワクしながら取り組んでいくというのがなかったら、どんな素晴らしい学習プログラムを組んだところで、変わるものにならないのではないかな。

だから難しいんですが、時間的なこともしっかり確保しながら、子どもの自主性、権利というものを、大事にしていくようなそういう関わりが非常に大事なのかなと考えております。

(千委員)

最後になりますが、残念ながら私は前回のときはもう大学に入っていました。やっぱりこの時代は、外国というものが遠かったから、みんなが興奮してたような気がします。その頃は、留学したい人が大勢いましたよね。何回でも行ったっていうような人が大勢いたと思うんですけども、今はやはり、外国というのが身近になってしまって、それこそ変な話かもしれないけれども、京都中が外国人みたいなことになって、何でも外国のこと見られたり聞けたりするんですよね。例えばハーバード有名な学校に、日本人は本当に数人しかいないみたいなことになって、何かもう、日本にいて、この状態で、大丈夫みたいな若い人が増えてる。

多分それは心配なことなんだと思いますけれども、多分子どもたちも、そういう感じではないのかと思うので、何かきっかけで、あの国に行ってみたいとか、これをもうちょっと勉強しておきたいとか、そういうことがきっかけに万博がなれば嬉しいんですけども。

あれもみたいこれも見たいとは思うんですけども、少し絞ったところを回るような計画を、それぞれ考えてもいいとは思うんですね。

とかく、こういう見学とか修学旅行になると詰め込む、1つのパビリオンを何分で次から次へみたいなことになると思うんですけども、そこをちょっと踏みとどまって、こことここだけゆっくりじっくり見るとか、そういうことをそれぞれの学校に、期待したいかなと思います。

皆さんおっしゃったけれども、事前学習をした方がいいんだろうとは思いますが、ただ時間をかけて、うまくいくかなという。

それもそのすべてを網羅するのではなく、もう1つにポイントを絞ってそこだけは詳しく事前学習して、あとはもう行ってびっくりみたいなことでもいいのかなと。少なくとも入場料がすごく高いので、どうやって家族でいくのかなと思っていたので、だけれども、子どもたちだけは行けるっていうのはいいかもしれませんが、逆にそうなる親は行かないかもしれません。

(前川教育長)

課題探究型の学習というのを、これまで進めてきてるわけですけど、結局はやっぱり学校教育という枠組みの中で、限られたものになっているとは思ってるんです。

特に、答えのない問いに挑戦するというところで頑張っているんですが、課題を発見する、課題に気づくっていうところは、まだまだやっぱり学校や教師が与えている。でも実はそこがすごく大事ななと思っていまして、今回の万博はテーマが統一されてますけども、様々なパビリオンがある中で、自分たちが何に関心を持つのかってのすごく大事ななとは思っています。

例えば、これまで小中高校、総合的な学習の時間ですとか、総合的な探究の時間ですとか、こういったことで探究的な学びの取り組みをしてるんですが、例えば、千委員がおっしゃったようにガイダンス的な事前学習ではなくて、その学校とかその学年が、ある1つのテーマによって子どもたちの学びをやって、その学びのテーマに基づいたパビリオンを中心に見に行く、そしてそこで感じたことを帰ってきて事後学習に生かしていく。

キャリア教育とかよく言うんですけど、職業を選ぶための教育ではなくて、自分の人生のテーマを考えるような教育を、これからしていかなければならないと思うんです。

そういう意味で、今回、各パビリオンのテーマから何を学ぶのかとか、それでどんな志を持つのかとか、それが自分のどういう行動に繋がるのかとか、ちょっと壮大な話ですけども、そういう万博を核とした学びの取り組みができたらすばらしいなというふうに感じています。

(西脇知事)

どうもありがとうございました。

もともとの私の想定ではですね、前半、最初の方で、今のような事前の準備とか、事後学習についても、大きくということで、かなり事前の準備とか、いろんな話があってそれはもう、もう1つ本当はもう、例えば環境でも、人口減少なんでもいいんですけど、ちょっとそういう、どういうことが学んだらいいのかなっていうのも、ご意見お伺いしようと思ったんですけど、今話を聞いてるとそれも、子どもさんたちに選んでもらうって話なんで、後半はですね、8人の万博プロデューサーによってこれ多分業界的にはいのちに関係するもので、かなり掘り下げたようなテーマですが、この8人のプロデューサー以外にですね、万博会場の設計のプロデューサーと、会場運営のプロデューサー、設計の藤本さんという方ですが、会場運営はイベントとかそういうことを考え、その10人のプロジェクトのうち、6人ぐらいがですね、京都にもう3回来られておられるんですが、気運醸成ラウンドテーブルというのをやっておられまして、どういうわけか醍醐寺で万博について語り合うというのをやっております、その理由というか理屈は、いのちを輝くためには、テクノロジーではないと。やっぱり文化とか精神性とかそういうものがないと、命と言わないから、だから京都っていう意味があるんだということらしいんですけども、そういういのち輝くって非常に幅が広いこともあって、いろんな文化だとか、もちろん環境もそうなんですけれども、様々な社会課題を解決する。もともとこれはヘルスケアというか、健康ということをやテーマに最初万博協会は考えたんですが、保健、医療、健康では狭すぎるんじゃない



かという話になって、いのち輝くになって、それで一気にテーマ性が広がったという話を聞いております。

そういう意味では、非常にたくさんあるんですね。それから小畑委員をはじめ、たくさんの方が、もともと教育の方が課題探究型になってるので、まさにこれ多分、きっと世の中の流れに沿ってるんだと思うんで、万博もそういう課題探究型になってるから、だから、万博のためだけにどうするかっていうのじゃなくて、ひょっとすると、課題探究型の教育の中身の一環として、万博が存在するということの方がより自然なのかもしれないのかなということをお話を伺って聞いておりました。

それからもう1つ思ったのは、確かに事前準備してやってもですね、まだ見てもいないんですね、そんなに想定だけで準備に時間をかけて、いいものになるかと、その通りだと。やっぱり見てきて、事後の学習ってことじゃないんですけれども、それが全員が全員興味を持つかどうかかわからないんですけれども、少しでも、子どもさんたちの今後の、前川教育長がおっしゃったような、人生のテーマを考えるようなことで、役立てればいいのかないかなというふうに思います。

いろんな、万博会場だけじゃなくて、そこで得たいろんなテーマ性というものを、また、そうじゃないフィールドで体験することによって、またより深めるみたいな、そういう70年代万博と違うのは、会場ですべてがうまく分かるということではないじゃないかと、こんなに複雑多様化してる中ではという意見も万博の委員会でもいただいてましてですね、そういう観点もありますので、もし具体的なテーマでこんなことを勉強していただきたいとか、事前の準備とか事業の学習とか、どういうふうに学びを深めていったらいいのかとか、それを子どもたちの成長にどうつなげていくのかとかいう、それも本当に我々事務方が参考になるようなことを少しでもいただければありがたいので、まずすいませんけど。

(小畑委員)

宇治の小学校でスクールミーティングがありまして、その時に黄檗山萬福寺を確認して、地域をどうやって活性化して人を集めたらいいかっていうテーマで、課題解決型の授業をしてるのを見て、そしてその中で生徒が自分たちで考えたイベントにも参加して、非常に面白かったんですよ。

同時に、そのあと、それを担任した先生が、そういう課題解決型の授業ってどういうプロセスで作っていくのかという、そんな話みたいな話を聞いて、これは非常に興味深かったですね。こういう課題解決型の授業というのは、必ずその生徒、子どもたちに探究力とかをつけていくのが非常に大事なだけけれども、それをやっていくためには、普通の授業と違って、よりその学校の本気度が問われる。そして、先生の力量が問われる。力量がない先生がいい加減にやると、とんでもない授業になる。つまり、自分で考えるっていうことだからベクトルが拡散しちゃって、授業にならなくなっちゃうんですね。

もちろんその方向をぎりぎりに決めるということではないけれども、ある程度の授業ビ

ジョンの中で、うまくコントロールしながら、こういうふうに、自分が決めたものじゃなく  
てやってるっていう授業がないとね、できないという、そういう印象を持ったんですね。

今回ですね、その先生はそういうことをやってるからすごい先生だなと思ったんだけど、  
万博を舞台にした壮大な課題解決型授業ってのはね、ちょっと語弊があるかもしれま  
せんけど、黄檗山とか宇治とかいう舞台よりも、ずっとグローバルで地球規模で、しかもそ  
こにもものすごいたくさんテクノロジーが詰まってる、そういう舞台の上での授業だから、こ  
ういうものを作ろうと思ったらそれこそ本当に学校の本気度と、それからその力量が試さ  
れる。

だけどそれをうまくやればですね、最初の発言の時に申し上げたんですけど、素晴らしい、  
子どもたちが成長していくんじゃないかというふうに思います。

だから、万博を舞台にしましょうなんていう課題解決型の壮大な授業というのは、子ども  
たちの成長と同時に学校の先生の力を磨いていく舞台にもなる。そういう意味で非常に大  
事なことなんじゃないかというふうに思います。

例えば万博を舞台にした壮大な課題解決型の事業ってどんなのがあるのかなと想像しま  
してね。例えば、ある国がやってるパビリオンにやって、生徒を連れて行きましょと決め  
ます。そうすると、事前にその国の歴史とか地政学的な立場とか、経済の状況とか、あるい  
はその国がどんなことを課題にしてるのかってことを勉強していくわけですね。当日、パビ  
リオンへ行くと、その国が主張してるそのテーマに沿ったいろんな提案とかテクノロジー  
が並んでるわけですよ。それを子どもたちは見て、そこから勉強して、学んだことや、こ  
の国は何でそういうことを言うんだろうかっていうことは、事前の勉強の中でね、何となく  
分かってくる。

そして、自分の立ち位置というのはその国とはちょっと違うんですね、日本という国に立  
っているから。展示した国とちょっと違う立ち位置にある自分から見たときに、そのパビリ  
オンが提案してる未来社会だとかテクノロジーっていうものに対する受けとめは、ちょっ  
と違うはずなんですね。そしたら、それは自分の立ち位置でそれをどういうふうに考えたら  
いいんだろうかっていうなことを、当日そのパビリオンを見たり、あるいはその説明する人  
と話をしたりなんかしながら考えて、そして、学校に戻ってね、生徒それぞれが自分はこん  
なことを考えて、こういうことが問題で、今はそういうことをやっていかなくちゃいけない  
んじゃないかって思ったっていう話を学校でそれぞれするわけですね。そうすると、同じも  
のを見てのに、人によって受けとめ方ややっぱり違うんだなというのは分かるわけですね。  
それでもって、なるほどこういう考え方もあるんだったら、自分の受けとめた考え方を少し  
修正しようとかとか、お互いにそういうことが刺激になってね、やっていける。

そういうような授業ですね、事前の学習と当日の見聞と、そしてそのあとの、ディスカッ  
ションみたいな、3つのステップの授業ね、いや、これものすごい面白い事業なんじゃない  
かなと思って、今話してるだけでもね、私なんか無茶苦茶ワクワクした授業ができるんじ  
ゃないかというような感じするんですよ。これをやろうと思うと相当、学校の本気度と、先生

の力量っていうものが必要だから、相当気合いを入れてやれば、かなり面白い効果が出てくるんじゃないかと。

そういう万博っていうそういうものすごい壮大な舞台の上で行われる壮大な学習を経験すれば、例えばグローバルな視点とか、地球環境の視点とか、あるいは国とか人によって考え方が違うんだとかね、多様性もあるんだろかってね、いろんなことで学べると思うんですね。そういう学びをできるような、そういう壮大な課題解決型の授業を万博を舞台にしてやったら、とっても面白い、いい事業ができるし、いい学習ができるんじゃないかと、こういうチャンスはもう万博の世界しかないんじゃないかという感じがしますね。

(安岡委員)

何十年に1回ぐらいの間に起きることで、子どもは宝だし、教育というのは将来に向けてそれが担保されるものであって、それでまた、将来は子どものためのものでありますから、そういったところを考えるとやっぱり、少なくとも3回ぐらいは行けるだけの経済を、お金の問題もありますけども、やはり見て聞いて、触ってというところが必要なのかなっていうところは思うんですけど、これだけ多くの地域の中で、紛争とか戦争とか、経済格差、先ほど小畑委員も言われましたように、いろんなところの取り組みから、1ヶ所に集まってこられるというところではあるので、そういった中で、学校教育の中で、その人たちの材料と言ったら失礼ですけど、いろんなデータを取ることによってね、その中で自分たちの意識とかが世界における中でどの位置にあるかということ、やはり確かめるべきかなっていうふうにも思いますし、いろいろとこのテクノロジーが発展してる中で、やはりそういったところを含めて、リーダーシップを取れるっていうところのかけ合わせたような、今後の未来像が必要なかなっていうふうには思います。例えば医療でも、患者さんを治すだけが医療ではなく、そこにどうやって生きる力を与えてあげるかということを含めて、いろんな方策っていうものは隠れてると思うんですね。

そういった方策を事前に考えながら、その中で来ておられるデータをとって、それを分析して、そのあとにつなげていく、自分たちの今後の生きざまというか、生きる課題を見つけて、それで新しい中にまた出ていくということが必要なのかなと。

大人が出るよりは、子どもが将来を担うんですから、学年によって全然感じ方も違いますし、小中高だけでも違うところがあるので、その辺は、学校の先生の力量も問われてくるというところが必要であろうかと思ってます。

(鈴鹿委員)

連動したイベントですね、具体的にこれがいいというわけじゃないんですけども、やっぱり一番身近になってくる体験ですね。体験にスポットを当てればいい。

やはり料金はあるし、そうなると、経済的にも時間的にも、そういうご家庭も絶対あると思うし、例えば、似たようなのは京都もここで体験できるから、ちょっと覗いてみようか。

そこに行ったとき、いや、お父さんお母さん、こんなことを、ここがね、本当のところはこうだった、同じように感じられるよというようなことを、一緒に話し合いがあるといいと思うので、連動イベントが結構大事になってくるのではないかなと思いました。

特に京都の市内とかでも、結構いろんなイベントが行われてるので、何だったらそういうイベント、例えば来週勉強してとか、もともとある既存のイベントに連動させて、何か万博独自のものを引っ張ってくれたら一番行きやすいのかなというふうに思いました。

また事前事後学習については、これは本当に探究型っていうのは難しいなと思います。ただ、何か1つ学校はある程度テーマを設定して、その中での探究というのが一番現実的かなと思いますし、またそれが低学年なのであれば、そこで決めました探究型をしました、それで帰って終わりではなくて、例えば次の年にもわたって、このときのきっかけとなった探究が次の学年の下で繋がるというのができたらいいのかなと。

私立の小学校を見ていると、そういう考え方をしているところが多く、6年間通して一つのことをとか、夏休みの宿題は0で、その間に知りたいことを見つけて探究していく、学年を越えて調べるというのが社会へ出て行く、宿題やって終わりでは済まなくて、自分の本当に興味あるものを知っていくというのでいいのかなと思います。

(藤本委員)

実はその先生も、小学校の先生ですけども、幼児教育の重要性に気づきましたということをおっしゃいました。幼児教育全体をこうしてることだけではなくて、やっぱり自分たちなりに、自分で主体に考えて感じて選んで、そしてまた、自分でそれを行動に合わせて、またみんなで振り返っていきたい。そういう繰り返しの中で、全く地図がないところなんで、自分なりの導き方みたいな、それはそういう理由があるから、これもまた答えのないところで自分なりの議論を作っていきたいです、みたいな。ここをこうやっぱり大事にしているんだから、正確な知識を知ること大事だと思うんですけども、やっぱりそれだけにとらわれずに、ぜひ、できるんじゃないかなとか、具体的な点はもちろんある程度絞れたらいいんじゃないけども

これを取り組みたいみたいなテーマを、うちの主体性、僕のを信じてやっていくっていうのが大事なかなというふうには思いました。

あとはやはり家庭との、年齢にもよると思うんですけども、これは学校教育だけで、学校現場だけで終わらせないで、保護者を巻き込んでいくみたいな、そういう取り組みっていうのはすごく大事なかなというふうに思います。

ちょっと話が違うかもしれんけど、一緒に定期勉強してる京阪神の園長先生がいるんですけども、いいなと思ったのが、全然違う話ですが、野菜を育てようと。

今だったらそこはちょっときゅうりみたいなね、夏野菜だったら、ポット買ってきて、みんなで植えるみたいなことが普通に何も考えないでやってたんですけど、その園は、1回みんなでその苗を買いに行く、ホームセンターに子どもを連れて行くんです。連れてってど

んな苗が幾らで売ってるか調べて、それを家でその話をして、お父さんとお母さんと、うちでどんな野菜を育てたらいいか、どんな料理に使いたいかっていうことを話し合わせて、それをまた幼稚園に持って行って、それでちゃんと予算を決めて、もう1回、買いに行く。そして、2つポットを買って、1つは園で育てて、もう1つは家で、家庭で育てる。それをまた料理する。

非常に1つの段階からいろんな枝葉の学びをするわけですね。今のは例えですけど、そんなアプローチの仕方っていうのを、ぜひ、保護者も巻き込んだようなものもいいのかなと思ったり。それからやっぱり理想は、子どもも1回ではなくて、せめて2回ぐらい行けると、やっぱりお金もありますけどね、自然とやっぱり、そこで学びの高まりっていうのがあるでしょう。

ただ、なかなか難しいのであれば、例えばせめて先生方が、やはり事前に行ったり、もう1回行ったりとかですね、これ1回あった先生方に事前に行って、先生方がこういうことだったらこんなやり方が面白いかなとかっていうことはやっぱり学校から行くっていうのも、僕はそこは予算という意味が大きいのかなというふうには思います。それからやっぱり学んできたことっていうのは、すごくいい話聞いたときっていうのはものすごく印象に残るんですけど、どんどん忘れていくわけで、それを一番定着させるのは、自分たちが今度はスピーカーになって、発表したり伝えていくことで、それを例えば、保護者に向けてやってもいいでしょうし、あるいは高校3年生が2年生に向けてやってもいいかもしれません。

それを聞いて2年生が、またその学びを、1つのベースにして、また万博へのアプローチが広がっていくみたいな、教室の中でだけで終わらせるのではなくて、学んできた人が今度はいわゆる先生になって、やっていく。そういう取り組みも、ちょっとまたいろんな可能性を生むんじゃないかなというふうに思いました。

それと1つは、別にクレームではないんですけど、この対象のところに幼稚園が入ってないので、園児は補助の支援がやられてるんですけど、対象学校の例えば、幼稚園とか入っていない。よろしくお願いいたします。

(千委員)

今の藤本委員がおっしゃった事後学習のやり方、好例だろうと思うんです。

例えば未来社会、テクノロジーとか、もちろんそういうテーマはあるわけですけども、いろんな新しいことを知らなかったことを鑑みて教えて欲しいと思いますけれども、やはりこの根底に、様々な国、日本がもう、この国はこれについてこう考えてる、この国はこうだっていうことを忘れないで、その結果だけではなくて、その国だからこう考えてる、こうやってるみたいなことが理解できるような言い方をして欲しいなと思って、それが万博の、基本だと思います。難しい言葉、そういうことを学ぶというだけの場所ではないと思うのでね。それで、日本と違うことがたくさんあるってことを学んで、その中から、少しでも興味深いこと、楽しいことを見つけて、そっちへ羽ばたいてみよう、外国行ってみようみたいな

ことに、最後はつなげられるといいと思います。

ちょっと先生の力量は、あんまり言ってもね、ただただお気の毒と思うだけですから。

それと、どういう方法で、学年ごとで、そういう事前準備をなさるのか。例えば200人いると同じことかわかりませんが、細かくしないで、大きく分けておいた方が。ちょっと話は違うかもしれないですけど、修学旅行は最近すごく個別化して、学年で行きませんよね。共通の思い出がなくなる。

自分はこっちだけど、話してる相手は違うコースに行ってたみたいなことになってしまって、昔は同じところにみんなで行ったから、後でいろんな話ができるけれども、今それがなくなると、これも、なかなかクラスごとにはいかないと思いますけれども、やっぱりある程度大まかな共通の記憶が残るような、小学校でも中学校でも高校でも、そういう形態で行けたらいいのかなと思います。

(前川教育長)

今、各委員の方のご意見を聞かしていただいて、プレッシャーに感じています。

予算が取れたので、どうぞ行ってくださいね、では、我々は仕事したことにならないので、学びにどうつなげるのかとか体験にどうつなげるのかとか、そのときだけじゃなくて将来、子どもたちの中で、どうそれが活きるのかということで、考えながらなんです。

だから、教育委員会としては、学校と議論をしながらいろんな提案ができるかっていうことが大事になってくるなとしみじみ感じました。

事前のこと、当日のこと、事後のこと、そこから、自分の学びなどの発表であったり発信であったり、ということを知りさせていただけました。

もう1つは千委員がおっしゃった、国による違いをやっぱりそこで体験できる、これは確かに大きいなというのを、気づかされました。

こういうことを含めて1つのやり方ではなくて、いくつかのやり方、万博で、これを教育委員会としてこういうことを学校で取り組んでみませんかという、その提案ができたらいいなというふうに思いますし、逆に自分で今言ってしまうながら大変だなと感じておられるんですけど、ぜひここについて、これからさしていただけたらなというふうに今感じました。ちょっと感想みたいなことですけど。

(知事)

どうも皆さんありがとうございました。

今日このまだこれから話なんで結論ではないんですけど、前川教育長のプレッシャーで先生の力量とか学校とか、こう言われたら大変だなんていうのは、私も分かる。

ただ、小中高で全然年代が違うってそれは、すべての学校と同じような取り組みを行われるのもこれはこれでなかなか非現実的なんで、そこは要するにできるところで、最大限発揮してもらおう。やっぱり、万博のときだけではなくて、課題探究型の教育の一環として、この

万博のチャンスを生かすとすると、万博のときってどういうことが課題探究型の学習に材料とかですね、舞台を与えてくれるのかっていうことを考えて、企画立案してもらおうと非常にありがたいのかなっていうことです。

いろんな印象で、確かに訪日外国人客が多いんで、京都に行けば外国人もいるんです。ただけどだからといって、これ京都府も京都市もなんですけど、本当に京都が多文化共生のできるまちになってるかという、実はそうじゃないようなこともあるので、まだまだ学ばなきゃいけない。外国人を見るっていうことについては、非常に当たり前のようになってる。そこは70年前と違うことなんですけど。

でも相変わらず京都市内で英語で生活できるエリアがあるかという、そんなことないですよ。

いや日本語教育にはボランティアでやってますけどとか、そういう意味ではやっぱり万博いろんな要素もあるし、いのち輝く未来社会の時代というテーマもあるんですが、やっぱり海外から国際的な視点っていうのは、ベースとしては絶対必要なのかなというなことも感じさせていただきました。いずれにしても学校現場でも、いろいろプレッシャーもあるし、ご負担をかけますが、せっかくのチャンスです。

藤本委員の幼稚園の話で、もともとですね、今回の予算化するって言ってもこれは債務負担行為としてっていうのは、今年度じゃなくて、令和7年度の予算化をするので、実際の予算化はまだこれからなんです、計算するのは。一応、枠としては、この心づもりで我々もやりますよということ、口だけじゃなくてということで、債務負担行為として、枠を設けて、具体的に積算、いろいろ考えて計算をしたいと思います。

そこは、ご意見を承らせていただきまして、ありがとうございました。

いずれにしてもこの万博、もう今日で、339日ですかね、になりまして、当然1年を切っておりまして、毎日毎日課題が出てきて、関係する部局は準備は大変なんですけれども、せっかくの機会なんでね、いろんな報道はされてますけれども、無料であれば、京都の子どもさんたちのために、何か役に立つ、残るようなものとして活用させていただくということが我々の仕事だなと思ってますので、引き続き、どうもありがとうございました。